

# 松 柏

3 月 号  
第 1026 号

題 一 月

松柏会初代会長

酒井忠悌

早春郊行

残雪擁村落。  
風寒田畝平。  
止筇絳水上。  
混々是春声。

残雪、村落を擁す。  
風寒くして田畝平らかなり。  
筇きょうを止む、絳水ほとりの上。  
混々是れ春声。

令和八年 鶴岡公園「開園百五十年」  
令和九年 荘内神社「創建百五十年」

荘内神社 宮司 石原純一



荘内松柏会の皆様はご存じかと思いますが、荘内神社の鎮座地が鶴ヶ岡城だった事を知らない市民が増えています。そこで

過去から学び直したいと思います。

酒井家の居城「鶴ヶ岡城」は、残念ながら時の政府の「廃城令」により明治五年から八年にかけて本丸御殿・御角櫓・大手門等全ての建築物が解体され、土塁の一部が崩され御濠も一部を残して埋め立てられました。工事は、全て人力で行う壮大なプロジェクトだったと推察されます。そして、明治九年に「二之丸址」が鶴岡公園として整備され、本年が開園百五十年の節目を迎えました。「本丸御殿址」は一年遅れて明治十年、荘内神社が創建されました。

御城の建材は、全て廃棄される運命でしたが建材の一部が再利用される事となりました。

当時の国家政策「外貨獲得」により、当地では西郷隆盛翁の進言で、輸出品目である「絹・茶」を始める事となり、赤川河川敷での実証試験の後に城内から十キロ以上離れた後田山が選ばれ、刀から鋏に持ち換えた武士たちが苦勞の末に開墾し、御城の建材を使い巨大な「蚕室」を建設されました。また、近郷近在の「豪農・豪商」にも譲渡される事となり、その中で「大手門」（正式名称「東大手御門」）の建材は、大山の「丸谷醤油店」に譲渡され倉庫として利用されていました。醤油



鶴岡公園東側にある「馬出遺構の石垣」

建造されてから「三百三十年」の時を経た「大手門大棟木」は、城下町に相応しい今後の活用を静かに待っております。

・大手門沿革

建造 元禄九年（一六九六）

姿 梁間三間・桁行七間

二階建て

・大棟木規模

梁成 一尺七寸

梁巾 一尺二寸

長さ 四四尺（十三、三三 m）

で展示公開され好評です。

# だだちや豆の由来・再考

本会園芸講師 江頭宏昌

〈経緯と羽柴雄輔について〉

令和七年五月、知人からだだちや豆に関する古い記事を見つけたという連絡を受けた。読んでみたところ、だだちや豆の歴史に新たな事実や仮説が浮かび上がったので、ここに紹介しておきたい。それは大日本農会の雑誌「大日本農會報告」の明治二十八（一八八五）年の記事で、著者は羽柴雄輔氏であった。

ちなみに大日本農會は明治十四（一八八一）年に設立され、今も活動を続けている日本でも最も歴史の長い全国的な農業団体である。農事功勞者に紫白綬有功章や緑白綬有功章などを授与している団体といえど存じの方もいるかも知れない。大日本農會が明治二十四年に創刊した「大日本農會報告」は後に「農業」に改名され、現在に至るまで百三十年以上にわたり、品種、肥料、経営、農政などに関する種々の情報を発信してきた。

一方、著者の羽柴雄輔氏のことは、恥ずかしながら全く知らなかった。庄内日報社の「郷土の先人・先覚99」によると、嘉永四（一八五二）年、松山藩（現、酒田市）に生まれ、十七歳で戊辰戦争にも参加。藩校里仁館や庄内各地の小学校の教師を務めた。明治三十九（一九〇六）年以降、東京帝国大学史料編纂係や慶應義塾図書館にも

勤務した。明治十九（一八八六）年に東京の「人類学会」入会后、明治二十三年、博物学・考古学者の松森胤保を会長に迎え、「奥羽人類学会」を設立。歴史、考古、民俗、人類学に関する論文や著述を数多く残した。



羽柴雄輔氏

史料研究家。松山町生まれ。博物学、人類学を研究。明治二十三年に松森胤保を会長に奥羽人類学会を組織、東北でも屈指の考古学研究の基礎を確立した。松山藩史料四十二巻を編集、考古学に関する研究成果を「東京人類学会雑誌」などに発表。大正十年十二月五日七十歳で死去。

©庄内日報社 HP より

## 〈羽柴氏が育成したエダママ品種〉

その羽柴氏が大日本農會報の明治二十八（一八九五）年八月号（第一六七号）の五十ページ目上段にこんな記事を書いている。

「枝豆用大豆三種（甲）娘盛は早生にして余の工夫にて新種を造り出せしもの、（乙）精選ダダチャ豆は中生にして庄内名産のダダチャ豆より選種せしもの、（丙）砂糖袋は晩生にして余の工夫にて新種を造り出せしものなり、右三種 弊家の特有品にして美味を有し利益あり本年限り 甲種は五百名、乙種は一千名、丙種は百名を限り種子を頒

與せんとす、望みの諸君は本年九月卅日迄に一種に付郵券四銭封入申込あれば廿五匁以上発送すべし（羽前國西田川郡鶴岡町字高畑甲二十七番地 羽柴雄輔）

## 〈羽柴氏の記事に対する3つの考察〉

この文章から気付いたことが三つある。

一つは、ダダチャ豆のネーミングの由来についてである。「松柏」の二〇〇九年九月十五日号に「だだちや豆の由来考」を寄稿し、かつて「タタガ（だだ）が「豆」といわれた豆があったこと、その名前が生まれたのは、酒井忠篤公が家督を継いだ明治十四年から明治十七年の間であると書いた。それは小真木の五十嵐（後に太田に改名）孝太が酒井忠篤公に枝豆を献上したのがきっかけとなつて「タタガ豆（おそらく濁点を付けてだだが豆と読む）」という愛称が生まれ、その「タタガ豆」を明治十七年に松森胤保氏が「両羽博物図譜」の中に描いたからである。

しかし、「タタガ豆」がいつ「ダダチャ豆」と呼ばれるようになったのかはずっと謎のままだった。羽柴氏の記述から分かったのは、「タタガ豆」という名前が生まれてわずか十年あまりの間に「ダダチャ豆」という名前が定着し、庄内名産といわしめるほど知名度が上がっていたことである。

二つ目は、白山だだちやの由来についてである。白山だだちやの元になったのは、白山の森屋初氏が創選した藤十郎だだちやで、それは明治四十（一九〇七）年に初氏が寺田の小池助右衛門家からもらった早生品種「娘茶豆」から選抜したもの

である。ここから先は江頭の空想であるが、羽柴氏が明治二十八年に頒布した「娘盛」が普及した可能性のある時代とピッタリと重なることから、「娘茶豆」はひよっとしたら「娘盛」の別名ではなかったか。「むすめもり」はやや発音しにくい。茶豆の娘盛という意味で、「娘茶豆」と呼ばれていたのではなからうか。

ただし、もしそれが本当なら羽柴氏の説明からすると現在の白山は、明治時代にダダチャ豆といわれていた品種とは異なる系譜上にあることになる。しかし一方で、「娘盛」が「娘茶豆」と別品種だとすれば、これまで考えられてきたように「白山」は明治時代のダダチャ豆に直接つながる可能性もある。

三つ目は、晩生の「砂糖袋」は、現在の尾浦、庄内五号など、糖度の高い晩生の紫花品種の元になったものではないか。

縷々、勝手なことを述べてきた。もちろん現代のただちや豆品種群は羽柴氏の育成系統だけに由来するのではない。有名、無名の多くのエダマメ栽培者が黙々と変異系統を見出だし、多様なただちや豆品種を築き上げてきた歴史を否定するつもりは一切ない。しかし松森胤保氏と一緒に活動していた羽柴雄輔という気骨ある人物が、ただちや豆の初期の歴史からすっぽり抜け落ちていたことを反省し、あえてここに紹介するものである。

松柏枝豆の会の皆さんが毎年松柏会館で直売所を開き、7月中旬～9月初旬まで、枝豆の直売を行っています。お客さまには「美味しい」と好評を得ています。



松柏種苗部が販売している「だだちゃ豆」の種子  
これらは松柏会の先人が作り出したものだが、羽柴氏が創り出した品種の系譜上にあるのだろうか？

# 心に残る歌

(題字・中村 東)

そのII

175

本会郷学講師 東山 昭子

露のたうほろほろにがき香さへしてさやかに吾れの手につまれけり

馬場あき子 作 (馬場あき子全集 巻一 歌集「早笛」より)

毎日替わりのように変わる寒暖の差に、体調管理も大変な冬ではあったが、黒川能王祇祭も終わり、節分会星祭りも過ぎると、やはり春の気配は日々近づいてくる。雪囲いの中でバンケが鮮やかな姿を見せてきた。「ほろほろにがき」の柔らかなさに惹かれて掬い取った歌である。日本海側では、ドカ雪に悩まされたが、太平洋側は長期にわたり降雨がなく河川は渇き、ダムが枯渇し湖底に沈んでいた建物がむき出しにそのままを見せている。春耕も田植えも心配な地元農家の声も伝えられ、人智を超えた自然の警告が聞こえてくる。

草つみて餅につく夜は母と吾れ子供の如く厨に動く

すり鉢の小さきをいひいひ母がつくよもぎ団子の匂ひひろがる

ひとりふと扇を取れば脈脈と通ひ来るものよ笛の旋律よ

幅せまき野川あふるる雪解水のびる露のたうしぶきにぬるる

馬場あき子の第一歌集「早笛」は「まひる野叢書」として昭和三十年四月に刊行された。「早笛」は能の後シテの登場に使用される笛の旋律と言う。その花やかな若々しい意思が厚く重たい舞の床にひびきわたるのを愛し、今もなお、あの暗い能舞台にキラキラした命をさらす美しい人を思う時、閉ざされた命の開放に新しい勇気が湧くと語り、それは同時にいまだ変革しえない我が命のかたはしをそこにみつめるからかもしれないと語っている。一生懸命な自分、正しいものが何なのかを見つけようとしている幼い真剣な自分の瞳をさらに強く若々しく一直線に伸ばし、正直な自分でありたいと綴っている。父の事業の失敗で貧窮のどん底に居た。昭和女子大國文科の学生時代に「まひる野」に入会し、教職に就き、同人の岩田正と一途な恋を交らせ反戦の戦いに身を投じた。黒川能と出会い多くの文人と庄内をつなぎ、庄内の本質的な良さを、国内はもとより国際的に高めた歌人馬場あき子の、終生変わらることのなかった命の讃歌が作品化されている。

教へ子も吾れもふたたびたたかかぬ誓ひ新たに旗ひるがへす

舞ひたしとひたに思へど師に報ゆる謝礼のことも心に痛し

人恋ふと語ればすぐに親捨ててゆくごと憂ふ母の瞳よ

少年の明るさよ君らの無邪気さよ乱暴も放埒も皆許したし

# 令和8年度 通常総会の「報告

去る、2月17日松柏会館において第26回通常総会が開催され、第1号議案〜第3号議案まで、全議案可決承認いただきました。

第1号議案 令和7年度事業報告並びに収支決算書について

第2号議案 令和8年度事業計画(案)並びに収支予算(案)について

第3号議案 役員改選について

また、総会終了後に新理事の互選会において、理事長並びに常任理事が決定しました。結果は左記のとおりです。2年間よろしくお願いいたします。

## 新役員

## ご苦労様でした(退任者)

理事長 五十嵐 大介

前理事 菅原 和行

常任理事 大滝 慶一

前理事 水口 憲一

常任理事 秋田 幸司

前監事 三矢 正士

常任理事 長谷川 長吉

今後は、会員として変わらぬご理解ご協力をお願いいたします。

常任理事 金内 秀和

常任理事 日向 常浩

常任理事 佐藤 謙

理事 加藤 健市

理事 齋藤 久

理事 佐藤 敬一

理事 石垣 忠彦

理事 齋藤 弘之

理事 青澤 慶一

監事 佐藤 純(新)



選・東山 昭子

鶴岡若葉町 村越 勝子

「ハーモニー」ミラノ五輪のテーマとふ今一番に必要なもの

この地球に戦争と平和ある中を五輪選手の躍動うつくし

三月は春を迎ふる高鳴りを砕きし東日本大震災ありし

国境のなき大空を目指しゆく白鳥の旅立ちやがて始まる

吹く風にかすかな春の匂ひあり足取り少し軽くなりたり

鶴岡市大淀川 佐藤 文子

風雪に耐へてこれまで百幾年経ちたる我が家の梁をし見上ぐ

烏瓜の蔓絡まりしカルミアの花芽は確と枝先に見ゆ

とりどりの花色魅せて咲くピオラ積雪続くハウスの中を

銀盤の競技を終えて選手言ふ相手の為に力尽くすと

此の頃は略語生まれて早や飛び交ひ惑ふばかりに日は過ぎてゆく

## 種苗部だより

じゃがいも種 販売中！  
春苗の予約受付中

※春苗はGW明けから販売します

日	月	火	水	木	金	土
3/15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31	4/1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25

休業日

営業時間：9:00~17:00

Tel・fax 0235-23-8955

## 2月黒板

- 7日(土) 郷学研修会
- 9日(月) 稲酔会勉強会
- 10日(火) 種苗部取締役会
- 15日(日) 松柏誌発行
- 17日(火) 第26回通常総会
- 20日(金) 松柏誌編集会議
- 21日(土) 無尽蔵会

余

潤

異常気象により全国各地で大雪の被害や渇水が発生している中で、庄内地方は寒い日が続いたものの、ほとんど災害もなく春を迎えることができました。今年ももうすぐ枝豆の播種作業の時期が来ます。毎年多くの方から「松柏の枝豆は美味しい」と言われ、贈答用としても好評を得ています。これは生産者と種苗部の連係プレー、研究努力の結果と思ひ、深く敬意を称します。昨今の気象状況下により採種の問題が起きていますが、松柏の枝豆の品質、収量共に落ちないよう今後も努力していただきたい。さらに枝豆は鶴岡の特産品でもあるので、品質の良いものを提供できるように鶴岡全体でも頑張っていたきたい。(日向)

編集発起人 特定非営利活動法人 庄内松柏会  
〒991-0001 庄内市山形町新町1-18  
理事長 五十嵐大介

当会では松柏誌や情報提供をLINEで行っております。会員の皆様は必ずご登録をお願いいたします。

QRコードを読み取り、トーク画面で氏名・住所(集落名)を入力し送信してください。



※氏名の送信がないと、どなたか認識できない為お願いいたします